

妙法蓮華經。序品。第一

姚秦の三藏法師鳩摩羅什 詔を奉して譯す

是の如きを我聞きき。一時、佛、王舍城・耆闍崛山の中に住したまい、大比丘衆萬二千人と俱なりき。皆是れ阿羅漢なり。諸漏已に盡くして復煩惱なく、己利を速得し 諸の有結を盡くして、心自在を得たり。

其の名を阿若憍陳如・摩訶迦葉・優樓頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舍利弗・大目犍連・摩訶迦旃延・阿菟樓駄・劫賓那・憍梵波提・離婆多・畢陵伽婆蹉・薄拘羅・摩訶拘絺羅・難陀・孫陀羅難陀・富樓那彌多羅尼子・須菩提・阿難・羅睺羅といふ。是の如き衆に知識せられたる大阿羅漢等なり。

復學・無學の二千人あり。摩訶波闍波提比丘尼、眷屬六千人と俱なり。羅睺羅の母耶輸陀羅比丘尼、亦眷屬と俱なり。

菩薩摩訶薩八萬人あり。皆阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せず。皆陀羅尼を得、樂說辯才あつて、不退轉の法輪を轉じ、無量百千の諸佛を供養し、諸佛の所に於て衆の徳本を植え、常に諸佛に稱歎せらるることを爲、慈を以て身を修め、善く佛慧に入り、大智に通達し、彼岸に到り名稱普く無量の世界に聞えて、能く無數百千の衆生を度す。

其の名を文殊師利菩薩・觀世音菩薩・得大勢菩薩・常精進菩薩・不休息菩薩・寶掌菩薩・藥王菩薩・勇施菩薩・寶月菩薩・月光菩薩・滿月菩薩・大力菩薩・無量力菩薩・越三界菩薩・毘陀婆羅菩薩・彌勒菩薩・寶積菩薩・導師菩薩といふ。是の如き等の菩薩摩訶薩八萬人と俱なり。

爾の時に釋提桓因、其の眷屬二萬の天子と俱なり。

復名月天子・普香天子・寶光天子・四大天王あり。其の眷屬
萬の天子と俱なり。

自在天子・大自在天子、其の眷屬三萬の天子と俱なり。

娑婆世界の主梵天王・尸棄大梵・光明大梵等、其の眷屬萬二

千の天子と俱なり。

八龍王あり、難陀龍王・跋難陀龍王・娑伽羅龍王・和修吉

龍王・德叉迦龍王・阿那婆達多龍王・摩那斯龍王・優鉢羅

龍王等なり。各若干百千の眷屬と俱なり。

四緊那羅王あり、法緊那羅王・妙法緊那羅王・大法緊那羅王

・持法緊那羅王なり。各若干百千の眷屬と俱なり。

四乾闥婆王あり、樂乾闥婆王・樂音乾闥婆王・美乾闥婆王・

美音乾闥婆王なり。各若干百千の眷屬と俱なり。

四阿修羅王あり、婆稚阿修羅王・佉羅騫駄阿修羅王・

毗摩質多羅阿修羅王・羅睺阿修羅王なり。各若干百千の眷屬と

俱なり。

四迦樓羅王あり、大威德迦樓羅王・大身迦樓羅王・大滿

迦樓羅王・如意迦樓羅王なり。各若干百千の眷屬と俱なり。

韋提希の子阿闍世王、若干百千の眷屬と俱なりき。

各佛足を禮し退いて一面に坐しぬ。

爾の時に世尊、四衆に圍繞せられ、供養・恭敬・尊重・讚歎

せられて、諸の菩薩の爲に大乘經の無量義・教菩薩法・

佛所護念と名くるを説きたもう。佛此の經を説き已つて、

結跏趺坐し無量義處三昧に入つて身心動じたまわず。

是の時に天より曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶

曼殊沙華を雨らして、佛の上及び諸の大衆に散じ、普佛世界

六種に震動す。

爾の時に會中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・

夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人及び諸の小王・轉輪聖王、是の諸の大衆未曾有なることを得て、歡喜し合掌して一心に佛を觀たてまつる。

爾の時に佛眉間白毫相の光を放つて、東方萬八千の世界を照したもうに周徧せざることなし。下阿鼻地獄に至り、上阿迦尼吒天に至る。

此の世界に於て盡く彼の土の六趣の衆生を見、又彼の土の現在の諸佛を見、及び諸佛の所説の經法を聞き、并に彼の諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の諸の修行し得道する者を見、復諸の菩薩摩訶薩の種種の因縁・種種の信解・種種の相貌あつて菩薩の道を行ずるを見、復諸佛の般涅槃したもう者を見、復諸佛般涅槃の後、佛舍利を以て七寶塔を起つるを見る。

爾の時に彌勒菩薩是の念を作さく、
今者世尊、神變の相を現じたもう。何の因縁を以て此の瑞ある。今佛世尊は三昧に入りたまえり。是の不可思議に希有の事を現せるを、當に以て誰にか問うべき、誰か能く答えん者なる。
復此の念を作さく、

是の文殊師利法王の子は、已に曾て過去無量の諸佛に親近し供養せり。必ず此の希有の相を見るべし。我今當に問うべし。

爾の時に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷及び諸の天・龍・鬼神等、咸く此の念を作さく、
是の佛の光明神通の相を今當に誰にか問うべき。

爾の時に彌勒菩薩自ら疑を決せんと欲し、又四衆の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷及び諸の天・龍・鬼神等の衆會の心を觀じて、文殊師利に問うて言わく、

何の因縁を以て此の瑞神通の相あり、大光明を放ち東方萬八千の土を照したもうに、悉く彼の佛の國界の莊嚴を見る。

是に彌勒菩薩重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を以て問うて曰く、

文殊師利 導師何が故ぞ

眉間白毫の 大光普く照したもう

曼陀羅 曼殊沙華を雨らして

栴檀の香風 衆の心を悦可す

是の因縁を以て 地皆嚴淨なり

而も此の世界 六種に震動す

時に四部の衆 咸く皆歡喜し

身意快然として 未曾有なることを得

眉間の光明 東方

萬八千の土を照したもうに 皆金色の如し

阿鼻獄より 上有頂に至るまで

諸の世界の中の 六道の衆生

生死の所趣 善惡の業縁

受報の好醜 此に於て悉く見る

又諸佛 聖主師子

經典の 微妙第一なるを演説したもう

其の聲清淨に 柔輦の音を出して

諸の菩薩を教えたもうこと 無數億萬に

梵音深妙にして 人をして聞かんと樂わしめ

各世界に於て 正法を講説するに

種種の因縁をもつてし 無量の諭を以て

佛法を照明し 衆生を開悟せしめたもうを觀る

若し人苦に遭うて 老病死を厭うには

爲に涅槃を説いて 諸苦の際を盡くさしめ

若し人福有つて 曾て佛を供養し

勝法しょうぼうを志求ししよくするには 爲ために縁覺えんかくを説とき

若もし佛子ぶつしあ有あつて 種種しゆじゆの行ぎやうを修しゆし

無上むじやうえ慧もとを求もとむるには 爲ために淨道じやうだうを説ときたもう

文殊もんじゆしり師利しり 我われ此こに住じゆして

見聞けんもんすること斯かくの若ごとく 千億のくの事じに及およべり

是かくの如ごとく衆多しゆたなる 今當いままさに略りやくして説とくべし

我われ彼かの土どの 恒沙ごうじやの菩薩ぼさつ

種種しゆじゆの因緣いんねんをもつて 佛道ぶつだうを求もとむるを見みる

或あるは施せを行ぎやうずるに 金きん・銀ごん・珊瑚さんご

眞珠しんじゆ・摩尼まに 碑磔しやこ・碼碯めのう

金剛こんごう・諸珍しよちん 奴婢ぬび・車乘しやじやう

寶飾ほうじきの輦輿れんよを 歡喜かんぎして布施ふせし

佛道ぶつだうに回向えこうして 是この乘じやうの

三界がいだい第一だいいちにして

諸佛しよぶつの歎ほめたもう所ところなるを得えんと願ねがうあり

或あるは菩薩ぼさつの 駟馬しめの寶車ほうしや

欄楯らんじゆん華蓋けがい 軒飾こんじきを布施ふせするあり

復また菩薩ぼさつの 身肉手足しんにくしゆそく

及および妻子さいしを施ほして 無上むじやうだう道を求もとむるを見みる

又また菩薩ぼさつの 頭目ずめくしんたい身體しんたいを

欣樂こんぎやう施與せよして 佛ほとけの智慧ちえを求もとむるを見みる

文殊もんじゆしり師利しり 我われ諸王しよおうの

佛所ぶつしよに往詣おうけいして 無上むじやうだう道を問といたてまつり

便すなわち樂土らくど 宮殿くうでん臣妾しんしやうを捨すてて

鬚髮しゆほつを鬚除たいじよして 法服ほうふくを被きるを見みる

或あるは菩薩ぼさつの 而しかも比丘びくと作なつて

獨閑靜ひとりげんじやうに處しよし 樂ねがつて經典きやうでんを誦じゆするを見みる

又菩薩の勇猛精進し

深山に入つて佛道を思惟するを見る

又欲を離れ常に空閑に處し

深く禪定を修して五神通を得るを見る

又菩薩の禪に安じて合掌し

千萬の偈を以て諸法の王を讚めたてまつるを見る

復菩薩の智深く志固くして

能く諸佛に問いたてまつり聞いて悉く受持するを見る

又佛子の定慧具足して

無量の論を以て衆の爲に法を講じ

欣樂說法して諸の菩薩を化し

魔の兵衆を破して法鼓を撃つを見る

又菩薩の寂然宴默にして

天・龍恭敬すれども以て喜とせざるを見る

又菩薩の林に處して光を放ち

地獄の苦を濟い佛道に入らしむるを見る

又佛子の未だ嘗て睡眠せず

林中に經行し佛道を勤求するを見る

又戒を具して威儀缺くることなく

淨きこと寶珠の如くにして以て佛道を求むるを見る

又佛子の忍辱の力に住して

増上慢の人の惡罵捶打するを

皆悉く能く忍んで以て佛道を求むるを見る

又菩薩の諸の戲笑

及び癡なる眷屬を離れ智者に親近し

一心に亂を除き念を山林に攝め

億千萬歳以て佛道を求むるを見る

或は菩薩の 肴膳飲食

百種の湯薬を 佛及び僧に施し

名衣上服の 價直千萬なる

或は無價の衣を 佛及び僧に施し

千萬億種の 栴檀の寶舎

衆の妙なる臥具を 佛及び僧に施し

清淨の園林 華果茂く盛んなると

流泉浴池とを 佛及び僧に施し

是の如き等の施の 種種微妙なるを

歡喜し厭くことなくして 無上道を求むるを見る

或は菩薩の 寂滅の法を説いて

種種に 無数の衆生を教詔する有り

或は菩薩の 諸法の性は

二相有ること無し 猶お虚空の如しと觀ずるを見る

又佛子の 心に所著なくして

此の妙慧を以て 無上道を求むるを見る

文殊師利 又菩薩の

佛の滅度の後 舍利を供養する有り

又佛子の 諸の塔廟を造ること

無數恒沙にして 國界を嚴飾し

寶塔高妙にして 五千由旬

縱廣正等にして 二千由旬

一一の塔廟に 各千の幢幡あり

珠を以て交露せる幔あつて 寶鈴和鳴せり

諸の天・龍神 人及び非人

香華伎樂を 常に以て供養するを見る

文殊師利 諸の佛子等

舍利を供せんが爲に 塔廟を嚴飾して

國界自然に 殊特妙好なること

天の樹王の 其の華開敷せるが如し

佛一の光を放ちたもうに 我及び衆會

此の國界の 種種に殊妙なるを見る

諸佛は神力 智慧希有なり

一の淨光を放つて 無量の國を照したもう

我等此れを見て 未曾有なることを得

佛子文殊 願わくは衆の疑を決したまえ

四衆欣仰して 仁及び我を瞻る

世尊何が故ぞ 斯の光明を放ちたもう

佛子時に答えて 疑を決して喜ばしめたまえ

何の饒益する所あつてか 斯の光明を演べたもう

佛道場に坐して 得たまえる所の妙法

爲めてこれを説かんとや欲す

爲めて當に授記したもうべしや

諸の佛土の 衆寶嚴淨なるを示し

及び諸佛を見たてまつること 此れ小縁に非じ

文殊當に知るべし 四衆龍神

仁者を瞻察す 爲めて何等をか説きたまわん

爾の時に文殊師利、彌勒菩薩摩訶薩及び諸の大士に語らく、

善男子等、我が惟付するが如き、今佛世尊、大法を説き、

大法の雨を雨らし、大法の螺を吹き、大法の鼓を撃ち、大法の

義を演べんと欲するならん。

諸の善男子、我過去の諸佛に於て曾て此の瑞を見たてまつり

しに、斯の光を放ち已つて、即ち大法を説きたまいき。是の故

に當に知るべし、今佛の光を現じたもうも亦復是の如く、

衆生をして咸く一切世間の難信の法を聞知することを得せしめんと欲するが故に、斯の瑞を現じたもうならん。

諸の善男子、過去無量無邊不可思議阿僧祇劫の如き、爾の時に佛います、日月燈明如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號く。正法を演説したもう、初善・中善・後善なり。其の義深遠に、其の語巧妙に、純一無雜にして、具足清白梵行の相なり。聲聞を求むる者の爲には應ぜざる四諦の法を説いて、生老病死を度し涅槃を究竟せしめ、辟支佛を求むる者の爲には應ぜざる十二因縁の法を説き、諸の菩薩の爲には應ぜざる六波羅蜜を説いて、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切種智を成ぜしめたもう。

次に復佛います、亦日月燈明と名く。次に復佛います、亦日月燈明と名く。是の如く二萬佛、皆同じく一字にしてにちがつとうみよう。又同じく一姓にして頗羅墮を姓とせり。彌勒當に知るべし、初佛・後佛、皆同じく一字にして日月燈明と名け、十號具足したまえり。説きたもう所の法、初・中・後善なり。

其の最後の佛未だ出家したまわざりし時八王子あり。一を有意と名け、二を善意と名け、三を無量意と名け、四を寶意と名け、五を増意と名け、六を除疑意と名け、七を響意と名け、八を法意と名く。是の八王子、威徳自在にして各四天下を領す。是の諸の王子、父出家して阿耨多羅三藐三菩提を得たもうと聞いて、悉く王位を捨て、亦隨い出家して、大乘の意を發し、常に梵行を修して皆法師と爲れり。已に千萬の佛の所に於て諸の善本を植えたり。

是の時に日月燈明佛、大乘經の無量義・教菩薩法・佛所護念と名くるを説きたもう。是の經を説き已つて、即ち大衆の

中に於て結跏趺坐し、無量義處三昧に入つて身心動じたまわす。

是の時に天より曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華を雨らして、佛の上及び諸の大衆に散じ、普佛世界六種に震動す。

爾の時に會中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人及び諸の小王・轉輪聖王等、是の諸の大衆未曾有なることを得て、歡喜し合掌して一心に佛を觀たてまつる。

爾の時に如來、眉間白毫相の光を放つて、東方萬八千の佛土を照したもうに、周徧せざるることなし。今見る所の是の諸の佛土の如し。彌勒當に知るべし。

爾の時に會中に二十億の菩薩あつて、法を聽かんと樂欲す。是の諸の菩薩、此の光明普く佛土を照すを見て、未曾有なることを得て、此の光の所爲因縁を知らんと欲す。

時に菩薩あり、名を妙光という。八百の弟子あり。是の時に日月燈明佛、三昧より起つて、妙光菩薩に因せて大乘經の妙法蓮華・教菩薩法・佛所護念と名くるを説きたもう。六十

小劫座を起ちたまわす、時の會の聽者も亦一處に坐して、六十小劫身心動せず。佛の所説を聽くこと食頃の如しと謂えり。是の時に衆中に、一人の若しは身、若しは心に懈倦を生ずる

あることなかりき。日月燈明佛、六十小劫に於て是の經を説き已つて、即ち梵・魔・沙門・婆羅門及び天・人・阿修羅衆の中に於て、此の言を宣べたまわく、

如來、今日の中夜に於て、當に無餘涅槃に入るべし。時に菩薩あり、名を德藏という。日月燈明佛即ち其れに記を授け、諸の比丘に告げたまわく、

是の德藏菩薩次に當に作佛すべし。號を淨身多陀阿伽度・

阿羅訶・三藐三佛陀といわん。

佛、授記し已つて、便ち中夜に於て無餘涅槃に入りたもう。

佛の滅度の後、妙光菩薩、妙法蓮華經を持ち八十小劫を満て

て人の爲に演説す。日月燈明佛の八子、皆妙光を師とす。

妙光教化して、其れをして阿耨多羅三藐三菩提に堅固ならし

む。是の諸の王子、無量百千萬億の佛を供養し已つて、皆

佛道を成ず。其の最後に成佛したもう者、名を然燈という。八

百の弟子の中に一人あり、號を求名という。利養に貪著せり。

復衆經を讀誦すと雖も而も通利せず、忘失する所多し、故に

求名と號く。是の人亦諸の善根を種えたる因縁を以ての故に、

無量百千萬億の諸佛に値いたてまつることを得て、供養・恭敬・

尊重・讚歎せり。

彌勒、當に知るべし、爾の時の妙光菩薩は豈に異人ならん

乎、我が身是れ也。求名菩薩は汝が身是れなり。今此の瑞を見

るに本と異なることなし。是の故に惟付するに、今日の如來も當

に大乘經の妙法蓮華・教菩薩法・佛所護念と名くるを説きた

もうべし。

爾の時に文殊師利、大衆の中に於て重ねて此の義を宣べんと欲

して、偈を説いて言わく

我過去世の 無量無數劫を念うに
佛人中尊有しき 日月燈明と號く

世尊法を演説し 無量の衆生

無數億の菩薩を度して 佛の智慧に入らしめたもう

佛未だ出家したまわざりし時の 所生の八王子

大聖の出家を見て 亦隨つて梵行を修す

時に佛大乘經の 無量義と名くるを説いて

諸の大衆の中に於て 爲に廣く分別したもう

佛此の經を説き已り 即ち法座の上に於て
跏趺して三昧に坐したもう 無量義處と名く
天より曼陀華を雨らし 天鼓自然に鳴り
諸の天・龍・鬼神 人中尊を供養す
一切の諸の佛土 即時に大に震動し
佛眉間の光を放ち 諸の希有の事を現じたもう
此の光東方 萬八千の佛土を照して
一切衆生の 生死の業報處を示したもう
諸の佛土の 衆寶を以て莊嚴し
瑠璃・頗黎の色なるを見ることあり
斯れ佛の光の照したもうに由る
及び諸の天・人 龍神・夜叉衆
乾闥・緊那羅 各其の佛を供養するを見る
又諸の如來の 自然に佛道を成じて
身の色金山の如く 端嚴にして甚だ微妙なること
淨瑠璃の中 内に眞金の像を現するが如くなるを見る
世尊大衆に在して 深法の義を敷演したもう
一一の諸の佛土 聲聞衆無數なり
佛の光の所照に因つて 悉く彼の大衆を見る
或は諸の比丘の 山林の中に在つて
精進し淨戒を持つこと 猶お明珠を護るが如くなるあり
又諸の菩薩の 施・忍辱等を行ずること
其の數恒沙の如くなるを見る
斯れ佛の光の照したもうに由る
又諸の菩薩の 深く諸の禪定に入つて
身心寂かに動せずして 以て無上道を求むるを見る
又諸の菩薩の 法の寂滅の相を知つて

各 其の國土に於て 法を説いて佛道を求むるを見る
爾の時に四部の衆 日月燈佛の
大神通力を現じたもうを見て 其の心皆歡喜して
各各に自ら相問わく 是の事何の因縁ぞ
天・人所奉の尊 適めて三昧より起ち
妙光菩薩を讚めたまわく 汝は爲れ世間の眼
一切に歸信せられて 能く法藏を奉持す
我が所説の法の如き 唯汝のみ能く證知せり
世尊既に讚歎し 妙光をして歡喜せしめて
是の法華經を説きたもう 六十小劫を満てて
此の座を起ちたまわす 説きたもう所の上妙の法
是の妙光法師 悉く皆能く受持す
佛是の法華を説き 衆をして歡喜せしめ已つて
尋いで即ち是の日に於て 天・人衆に告げたまわく
諸法實相の義 已に汝等が爲に説きつ
我今中夜に於て 當に涅槃に入るべし
汝一心に精進し 當に放逸を離るべし
諸佛には甚だ値いたてまつり難し
億劫に時に一び遇いたてまつる
世尊の諸子等 佛涅槃に入りたまわんと聞いて
各各に悲惱を懷く 佛滅したもうこと一と何ぞ速かなる
聖主法の王 無量の衆を安慰したまわく
我若し滅度しなん時 汝等憂怖すること勿れ
是の徳藏菩薩 無漏實相に於て
心已に通達することを得たり 其れ次に當に作佛すべし
號を曰つて淨身と爲けん 亦無量の衆を度せん
佛此の夜滅度したもうこと 薪盡きて火の滅ゆるが如し

諸の舍利を分布して 無量の塔を起つ

比丘・比丘尼 其の數恒沙の如し

倍復精進を加えて 以て無上道を求む

是の妙光法師 佛の法藏を奉持して

八十小劫の中に 廣く法華經を宣ぶ

是の諸の八王子 妙光に開化せられて

無上道に堅固にして 當に無數の佛を見たてまつるべし

諸佛を供養し已つて 隨順して大道を行じ

相繼いで成佛することを得 轉次して授記す

最後の天中天をば 號を燃燈佛という

諸仙の導師として 無量の衆を度脱したもう

是の妙光法師 時に一りの弟子あり

心常に懈怠を懷いて 名利に貪著せり

名利を求むるに厭くこと無くして 多く族姓の家に遊び

習誦する所を棄捨し 廢忘して通利せず

是の因縁を以ての故に 之を號けて求名と爲す

亦衆の善業を行じ 無數の佛を見たてまつることを得

諸佛を供養し 隨順して大道を行じ

六波羅蜜を具して 今釋師子を見たてまつる

其れ後に當に作佛すべし 號を名けて彌勒といわん

廣く諸の衆生を度すること 其の數量有ることなけん

彼の佛の滅度の後 懈怠なりし者は汝是れなり

妙光法師は 今則ち我が身是れなり

我燈明佛を見たてまつりしに 本の光瑞此の如し

是れを以て知んぬ今の佛も

法華經を説かんと欲するならん

今の相本の瑞の如し 是れ諸佛の方便なり

今の佛の光明を放ちたもうも 實相の義を助發せんとなり
諸人今當に知るべし 合掌して一心に待ちたてまつれ
佛當に法雨を雨らして 道を求むる者に充足したもうべし
諸の三乘を求むる人 若し疑悔有らば
佛當に爲に除斷して
盡くして餘りあることなからしめたもうべし